

私立中学校におけるコンピテンシー・ベースの教育方法改革実践 ー21世紀型資質・能力の育成をめざしてー

助 川 晃 洋 ・ 坂 本 徳 雄

I 研究の目的と方法

2016年12月21日に出席した中央教育審議会の「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」（＝中教審答申）を踏まえて、2017年3月31日に小・中学校、2018年3月30日に高等学校の学習指導要領が改訂・告示された。そこでは、「育成を目指す資質・能力」が、「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」ととらえられている⁽¹⁾。この三点は、2000年代に入る頃から、世界の国々や産業・経済界において台頭してきた能力・学力論の知見⁽²⁾、代表的にはOECDのDeSeCoプロジェクトが示したキー・コンピテンシーや⁽³⁾、国際団体ATC21sが提唱した21世紀型スキルの概念を踏襲したものである。またそれらは、国立教育政策研究所（＝国研）が整理した「21世紀型能力」の三層構造（「基礎力」、「思考力」、「実践力」）⁽⁴⁾や、学校教育法第30条2（第4章「小学校」。中学・高等学校にも準用）で規定された学力の三要素（「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力その他の能力」、「主体的に学習に取り組む態度」）と親和性が高い。そして関連する機関研究プロジェクトとしては、国研の「資質・能力を育成する教育課程の在り方に関する研究－目標・内容、指導方法、評価の一体的検討－」（2014～2016年度）が有名である。研究成果は、1「使って育てて21世紀を生き抜くための資質・能力」から5「資質・能力の包括的育成に向けた評価の在り方の研究」までの一連の報告書にまとめられており、そのうち1は、「理論編」として位置づけられて、すでに書籍化されている⁽⁵⁾。

このような行政・政策サイドの動きからは、これからの時代に求められる資質・能力を同定し、その育成に資することが期待される取り組みの標準的なあり方を提案しようとする目論見が感じられる。それに同調して、現場レベルでも、資質・能力重視の方針が、かなり共有され、浸透しつつある。しかし学校ごとに、校訓や建学の精神、ポリシー、めざす児童・生徒像、地域性といった理念や目的・目標、条件の違いがあることから、問題解決力や協働する力といった汎用的スキルを強調するところもあれば、情意、すなわち関心・意欲・態度や人格特性を重視するところもあるというように、どこかに主眼を置いた営為が、各々別個に展開されているのが実情であろう。そのため実践（的）研究は、現段階では、必然的に個別事例の調査・報告が主とならざるを得ず、それぞれの概要を捉え、特徴を抽出することが、まずは、とりあえず優先課題として認識されているように思われる。以上の動向に鑑みて、本研究でも、一つの学校だけを俎上に載せる。ただし対象とするケースは、学校設置者別では、国公立という通常のパターンではなく⁽⁶⁾、私立であり、この点については、管見の限り前例がない。

本研究の目的は、2018年度の宝仙学園中学校共学部理数インター（東京都中野区に所在する中高一貫校の中等部であり、以下、正式名称の使用は避け、宝仙学園中学校と略記する）における資質・能力の育成を志向した、いわゆるコンピテンシー・ベースの教育実践の実態を明らかにすることである。この目的を果たすために、研究方法として、次の三つの事項を設定する。第一は、資質・能力全般に関する公的な説明の要点の確認である（Ⅱ）⁽⁷⁾。第二は、宝仙学園中学校の独自教科「理数インター」が重点に据えている資質・能力の特定と、その育成プログラムの提示である（Ⅲ－１）。第三は、「理数インター」の授業における生徒の資質・能力育成過程の追跡である（Ⅲ－２）。

なお執筆分担であるが、Ⅰ、Ⅱ、Ⅳは助川の単独、Ⅲは助川と坂本の共同による。坂本は、2015年4月から2019年3月まで、4年にわたって宝仙学園中学校副校長を務め、同校の教育改革を

リードしてきた人物である。

Ⅱ 中教審答申の資質・能力論

中教審答申では、第1部「学習指導要領等改訂の基本的な方向性」の第5章「何ができるようになるか—育成を目指す資質・能力—」において、副題にある通り、資質・能力の問題が真正面から、詳しく論じられている⁽⁸⁾。その「概要」は、次の通りである⁽⁹⁾。

1. 育成を目指す資質・能力についての基本的な考え方

- ・ 育成を目指す資質・能力に共通する要素を明らかにし、教育課程の中で計画的・体系的に育んでいくことができるようにする必要がある。

2. 資質・能力の三つの柱に基づく教育課程の枠組みの整理

- ・ 教科等と教育課程全体の関係や、教育課程に基づく教育と資質・能力の育成の間をつなぎ、求められる資質・能力を確実に育むことができるよう、教科等の目標や内容を以下の三つの柱に基づき再整理することが必要である。

- ①「何を理解しているか、何ができるか（生きて働く「知識・技能」の習得）」
- ②「理解していること・できることをどう使うか（未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力等」の育成）」
- ③「どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか（学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力・人間性等」の涵養）」

3. 教科等を学ぶ意義の明確化

- ・ 子供たちに必要な資質・能力を育んでいくためには、各教科等をなぜ学ぶのか、それを通じてどういった力が身に付くのかという、教科等を学ぶ本質的な意義を明確にすることが必要になる。各教科等の教育目標や内容については、第2部（「各学校段階、各教科等における改訂の具体的な方向性」—引用者注）において示すとおり、資質・能力の在り方を踏まえた再編成を進めることが必要である。
- ・ 各教科等を学ぶ本質的な意義の中核をなすのが「見方・

考え方」であり、教科等の教育と社会をつなぐものである。子供たちが学習や人生において「見方・考え方」を自在に働かせられるようにすることにこそ、教員の専門性が発揮されることが求められる。

4. 教科等を越えた全ての学習の基盤として育まれ活用される資質・能力

- ・ 全ての学習の基盤となる言語能力や情報活用能力、問題発見・解決能力などを、各学校段階を通じて体系的に育んでいくことが重要である。

5. 現代的な諸課題に対応して求められる資質・能力

- ・ 現代的な諸課題に対応して、子供の姿や地域の実情を踏まえつつ、以下のような力を育んでいくことが重要となる。

○健康・安全・食に関する力

○主権者として求められる力

○新たな価値を生み出す豊かな創造性

○グローバル化の中で多様性を尊重するとともに、現在まで受け継がれてきた我が国固有の領土や歴史について理解し、伝統や文化を尊重しつつ、多様な他者と協働しながら目標に向かって挑戦する力

○地域や社会における産業の役割を理解し地域創生等に生かす力

○自然環境や資源の有限性等の中で持続可能な社会をつくる力

○豊かなスポーツライフを実現する力

6. 資質・能力の育成と、子供たちの発達や成長のつながり

- ・ 今回の改訂における教育課程の枠組みの整理は、各教科等で学ぶことを単に積み上げるのではなく、発達の段階に応じた縦のつながりと、各教科等の横のつながりを行き来しながら、教育課程の全体像を構築していくことを可能とするものである。

- ・ 資質・能力の育成に当たっては、子供一人一人の興味や関心、発達や学習の課題等を踏まえ、それぞれの個性に応

じた学びを引き出し、一人一人の資質・能力を高めていくことも重要となる。

このように中教審答申では、「何を学ぶか」から「何ができるようになるか」への転換という視点から、学校教育によって育てたい資質・能力が取り上げられている。しかしコンテンツとコンピテンシーは、双方で対立するのではなく、互いにかかわり合う。内容知と方法知は、それぞれが単線的に進行するのではなく、螺旋的に深化・発展しながら、ともに育ち、育てられる。そして資質・能力というと、どうしても思考力や主体性ばかりをイメージしがちであるが、知識が、その要素の一つとみなされており、いささかも軽視されていない点は重要である。ただし各教科等で習得した知識については、事実に「知っている」だけでよいのではなく、意味が「わかる」段階を経て、様々な学習や生活の場面で「使える」ような状態にまで高めていく必要がある⁽¹⁰⁾。また資質・能力は、特定の教科や領域の枠内にとどまるものではなく、それを越えた横断的な力として、教育課程全体で育む、換言すれば、全教育活動の総和の上に立って、子ども自らの自己形成として実現すべきものである。

Ⅲ 宝仙学園中学校「理数インター」の実践⁽¹¹⁾

1 身につけさせたい力とカリキュラムの概要

宝仙学園中学校では、2016年4月から新教科「理数インター」がスタートして、現在に至っている。そこでは、育成しようとする資質・能力として、次の三つが挙げられている。

第一は、「理数的思考力」である。同校のHPには、「（学校紹介＞）理数インターの意味」という見出しの下で、次のような記述が見られる（他の二つでも出典は同じであり、また引用に当たり、すべての改行を削除し、一部の形式を変更した点も共通である）。

「理数インターの『理数』は、『理数的思考力』」。

「『理数的思考力』は、自分自身の中で、あるいは相手に対して、物事を論理的に考え伝えることのできる能力。国際社会に求められる必須の力です」。

「理数的思考力（Logical Thinking）／繰り返し挑み論理的に考える力」

「論理的に考える力『理数的思考力』」

「理数的思考力／問題を発見し、仮説を立て、検証する。うまくいかなかった場合、別の方法や視点でアプローチを繰り返す。こうしたプロセスを通して身につける、物事を論理的に考える力です」。

第二は、「コミュニケーション能力」である。

「コミュニケーション能力（Communication Skills）／心と心を通わせる力」

「心と心を通わせる力『コミュニケーション能力』」

「コミュニケーション能力／相手を受け入れ、その意見に耳を傾けられる力。そして、自分の考えや意見を様々な表現方法を駆使して、人に伝えることのできる力です」。

第三は、「プレゼンテーション能力」である。

「プレゼンテーション能力（Presentation Skills）／発想や思考などを発表する力」

「発表する力『プレゼンテーション能力』」

「プレゼンテーション能力／説得力・構成力・表現力・分析力をみがいて、自分の意見や考え、研究の成果などを多く人の心に響くように発表する力です」。

宝仙学園中学校では、これらを十分に備えている人材こそが、グローバル社会の到来した「21世紀の世界標準」とみなされている⁽¹²⁾。

そして2018年度版「理数インター」実践プランは、次の通り策定されている⁽¹³⁾。

2018年度教科「理数インター」学年別学習計画表

1年【コラボレーション】

学期		1学期											2学期											3学期										
授業時数		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28					
大テーマ	共同・協働の楽しさ・面白さ、新たな思考と出会い												共同・協働の広さ・困難さ																					
小テーマ	仲間とのふれあい	発想とのふれあい											発想をカタチに											発想を表現する										
内容	・誕生日ディナー ・人間知恵の輪 ・ドミノ倒し ・マッシュアップ チャレンジ ・ストロークタワー ・ペーパータワー ・円 ・商店街のお店屋さん ・Zooレイアウト	・すごろくトーキング ・コマ渡り ・吹き出しトーク ・バーベキュー ・ゼググラム ・一筆書き旅行計画 ・コラボレーションパターン ・小学校とコラボ授業											・クエストエデュケーション 社会課題探究 ～Social Change First～ ◆日本一面白い学校を創る方法を考案せよ ・MESH ～MESHと運動した、こんな文房具があったら～ ・コラボレーションパターン ・Skit ～Fly Soup～											・Skit ～一年間の学びを表現しよう～ 理数インターの楽しさ、面白さを新中1に伝えよう～										
	< iPad使用アプリケーション > ロイノート												< iPad使用アプリケーション > ロイノート Google Classroom Google Forms MESH											< iPad使用アプリケーション > ロイノート Google Classroom Google Forms Movie										
	山手線駅 駅名アイデアへの応募												KJ法を活用											サンスタースタッフ アイデアコンテストへの応募										

2年【プレゼンテーション】

学期	1学期											2学期											3学期										
授業時数	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28					
大テーマ	プレゼンテーションを学ぶ											論理的思考力を学ぶ																					
小テーマ	話す力・聞く力を磨く											考える力・行動力を磨く											魅せる力を磨く										
内容	・ご飯に合うおかず ・ぼくの理想の月曜日の時間割 ・勉強大好き超人 ・宝仙水（4週～5週プロジェクト）											・プレゼンの型 ・より良いプレゼンをするための10の法則 ・PREP(Point / Reason / Example / Point)の紹介 ・PREP練習① 二考択一のお題(P)に対して、 P×1/R×1/E×1/P×1を作る。 ・PREP練習② 二考択一のお題(P)に対して、 P×1/R×2/E×2/P×1を作る。 ・PREP練習③ 二考択一のお題(P)に対して、 P×1/R×3/E×3/P×1を作る。 ・PREP練習④ 複数のお題(P)に対して、 P×1/R×3/E×3/P×1を作る。 ・アイデアの出し方① しりとり ・アイデアの出し方② プレインストーミング、KJ法											2学期に学んだ アイデアの出し方、 型のPREPを使い、 1年間のまとめプロジェクト を行う										

3年【ラーニング・コラボレーション・プレゼンテーションの深化】

学期	1学期											2学期											3学期										
授業時数	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28					
大テーマ	チーム・組織としての動きを磨く											価値あるものを磨く																					
小テーマ	共同・協働性を磨く、視点を広げる											共同・協働性の集大成																					
内容	・都内各地の課題 ・ヒット商品 ～コンビニコピーとドーナツ～ ・クエストエデュケーション 企業探究 【カルビー株式会社】 ～見逃ごされた資料資源を使って、 カルビーが地球共生プロジェクトを提案せよ～ ・ラーニングパターン											・クエストエデュケーション 社会課題探究 ～Social Change First～ ◆体育館を使って1ヶ月で1億円を稼ぐ方法を考案せよ ・クエストエデュケーション 新商品開発 ～SMALL START(起業家コース)～											・クエストカップ全国大会への参加 ・起業家への新商品 プレゼン発表会										
												「時間をかけてじっくり」からの脱却 →「ブラッシュアップ・改善」の短期サイクル 外部刺激から学ぶ (ミッションミーティングへの参加)																					

この表が示しているのは、上述した三つの力の育成という目標を達成するために、「理数インター」のテーマと内容を学年段階に応じ、相互の関係を意識しながら、授業時数との関連において組織した宝仙学園中学校ならではの3か年教育計画であり、まさに意図したカリキュラムそのものである。

2 授業の実際

宝仙学園中学校では、2018年度2～3学期の3年生を対象とした「理数インター」の授業は、教育と探求社が提供するクエストエデュケーションのプログラムに基づいて行われている。同社のHP中の「(事業概要＞) クエスト事業」欄では、次のように述べられている⁽¹⁴⁾。

現実社会を題材に「生きる力」を育む教育プログラムです。クエストエデュケーションは、2005年にスタートした、現実社会と連動しながら「生きる力」を育む教育プログラムです。生徒・学生は教室の中にいながら、授業の中で実在の企業や先人を題材に、チーム・個人で課題に取り組み、自ら感じ、考え、表現する学習スタイルを実践します。リアルな社会と連動した学びの体験を通して、経済や企業、働くことの意義についての理解を深め、自ら学ぶ力と豊かな創造性を育みます。

まず9月に入るとすぐに、単元「社会課題探究～ Social Change First～」が始まる。そこで生徒は、例えば「体育館を使って1ヶ月で1億円を稼ぐ方法を考案せよ」というような課題に取り組む中で、「時間をかけて、じっくり」から『ブラッシュアップ・改善』の短期サイクルへと学習スタイルの転換を図ることを求められる。

続いて11月以降は、単元「新商品開発～ SMALL START（起業家コース）～」に進む。単元目標は、次の通りである。

日常生活の中から「ビジネスの種」を生徒自ら発見し、生徒同士で協力しながら試行錯誤を繰り返し、新商品を開発して、グローバル化や技術革新によって、これまで以上に変化が激しく、先行きの見えない時代を生きる生徒たちに不可欠となる、新しい一歩を踏み出す主体性、他者と協働して価値を創造する力を育むことをねらいとする。

また単元計画は、次の通りである。

時	テーマ	学習内容
1	新商品を考えてみる。	「同世代の日常のあるある」から、新商品を考え、プレゼンにまとめる。
2	新商品の企画を磨き込む。	自分たちが考えた新商品の企画をさらに磨き込み、試作品を作る。
3	企画をクラスに発表する。	新商品を改めてプレゼンにまとめ、ポスターセッション形式で発表する。
4	調査に取り組む。	新商品をよりよくするために、顧客調査と競合調査に取り組む。
5	新商品を完成させる。	調査を元に新商品を革新し、「人に欲しがられる新商品」を作る。
6	最終プレゼンとリフレクションを行う。	5分のピッチ（短いプレゼン）にまとめ、最終発表に取り組む。

選考の結果、2019年2月16日に立教大学池袋キャンパスで開催されるクエストカップ2019という全国大会の起業家コース「スモールスタート」部門に、宝仙学園中学校代表として出場する3チームが決定している。そのうちの一つであるD組「さつまいも」のメンバー（5名）は、本番に向けた準備について、事後に、次のように振り返っている。

「3チームの中に選ばれるまでは、盛り上がりず、ぐだぐだだった」。

「企業の人へのポスターセッションをきっかけとして、とてもよいという評価だったので、じゃ、やろうと一気にまとまって、やるからには優勝したいという気持ちが強くなって、3チームの中に選ばれた。そこからが大変だった。2週間しかなかったの、まず優先順位を決め、短期集中で発表までこぎ着けた」。

「10代約100人、20代約130人、30代約70人の合計約300人の女性を対象に、街頭インタビュー調査をした」。

「アプリの機能改善をした。発表までの2週間、時間がなく、とりあえずやらなきゃと必死だった。集中してやった」。

そして同チームは、「携帯彼氏～彼氏の返品交換承ります。～」という作品で、グランプリ（優秀賞全10チーム中の1位）を獲得している（B組「初の海外旅行」、C組「チーム悟り」も、それぞれ「Fun Voice」、「悟りアプリ」という作品で優秀賞、佳作に選ばれている）。審査員の講評は、次のようなものであった。

グランプリを獲得したチームのアイディアは、着眼点がおもしろく、ペルソナ設定や市場調査の結果を踏まえて、発表が論理的に組み立てられている。これは売れる！

また大会の模様を見学した「理数インター」教科主任（当時）の米澤貴史教諭は、次のような総括を行っている。

他校の発表内容のアイディアも「あ、おもしろい」というものが多く、たくさんの刺激を受けることができました。他校では1年をかけて取り組んできたグループが多い中、宝仙では11月からの4か月で行うなどのハンデがありましたが、教科「理数インター」の3か年の学びの成果が、一つですが出たかなと思います。これからも、楽しく、ワクワクする「答えのない学び」をプロデュースしていきたいと思います。

Ⅳ 研究のまとめと今後の課題

本研究では、資質・能力に関する最も今日のかつ一般的な見解のポイントを押さえた上で、宝仙学園中学校のオリジナルである「理数インター」に着目し、2018年度分に限定して、資質・能力の育成という観点から、目標（生徒に、どのような力をつけることを目標とするか）－内容・課程（そのために何を対象に、どのような題材やテーマを選定し、どのような順番で排列するか）－授業（どのように授業のプロセスや形態を構成し、実行するか）について、順次論じてきた。その結果、次の三つの知見を導出することができた。

- （1） 中教審答申は、先行きの見えない変化の激しい社会を担う子どもたちに必要な資質・能力を三つの柱で構造的

に示しており、各教科のみならず、総合的な学習の時間や特別活動などを通じて、その育成を図るよう求めている。

- (2) 宝仙学園中学校の「理数インター」では、社会や世界と共有すべき資質・能力を理数的思考力とコミュニケーション能力、プレゼンテーション能力と定めており、それらの具現化に向けた取り組みの指針として、学年別学習計画表が作成されている。
- (3) 中3の2～3学期に、民間企業の教育プログラムに従って行われた「理数インター」の授業では、チームメイト同士の主体的かつ協働的な学びと、学校内外における成果公開の機会が重視されており、その結果、生徒の最終的な発表は、論理的なものに仕上がっている。

これらのうち、特に(2)と(3)が一体となって、Iで述べた意味での「実態」を物語っており、本研究の結論の中核を成している。

今後の課題としては、中高6年間にわたる「理数インター」の実践をフォローアップし⁽¹⁵⁾、高卒時点での生徒の進路状況を把握することで、効果検証の作業を行いたい。それが、出口保証の強化、とりわけ大学進学実績の向上につながっているかどうか、そして2021年1月実施予定の大学入学者共通テストにおける記述式問題の導入（脱稿後、印刷中だった2019年12月17日に、萩生田光一文部科学大臣が延期を表明した）など、思考力重視を謳う大学入試改革の動向に合致しているかどうかという問題は、送り出す側からすれば、将来のグローバルリーダーを云々する以前に、より喫緊かつ切実であって、しかも、どうしても避けて通ることができないからである。

注

- (1) 文部科学省 『小学校学習指導要領（平成29年告示）』 東洋館出版社 2018年 pp.18-19.
- (2) 松下佳代編著 『＜新しい能力＞は教育を変えるか 学

力・リテラシー・コンピテンシー』 ミネルヴァ書房
2010年

松尾知明 『21世紀型スキルとは何か コンピテンシー
に基づく教育改革の国際比較』 明石書店 2015年

田中耕治編著 『グローバル化時代の教育評価改革－日
本・アジア・欧米を結ぶ－』 日本標準 2016年

- (3) 助川晃洋 『教育方法改革の理論』 春風社 2018年
pp.53-72.

- (4) 研究代表者勝野頼彦 『教育課程の編成に関する基礎的研
究 報告書5 社会の変化に対応する資質や能力を育成
する教育課程編成の基本原則』 国立教育政策研究所
2013年3月 pp.83-98.

- (5) 国立教育政策研究所編 『資質・能力〔理論編〕』 東洋
館出版社 2016年

- (6) 田中耕治・岸田蘭子監修 京都市立高倉小学校研究同人・
京都大学大学院教育学研究科教育方法研究室著 『資質・
能力を育てるカリキュラム・マネジメント 読解力を基盤
とする教科の学習とパフォーマンス評価の実践』 日本標
準 2017年

藤井千春・滋賀大学教育学部附属小学校 『7つの資質・
能力 教科の本質を生かし資質・能力を育てる授業デザイ
ン』 明治図書出版 2019年

- (7) 法令文書として様々な制約があるために、どうしても言
葉足らずになりがちな学習指導要領ではなく、中教審答申
に依拠する。

助川晃洋・坂本徳雄 「『社会に開かれた教育課程』の概
念と実践－学習指導要領の基底－」 『教育学論叢』第
35号 国土館大学教育学会 2018年2月 p.118.

- (8) 文部科学省教育課程課・幼児教育課編 『別冊初等教育
資料』2月号臨時増刊（通巻950号） 東洋館出版社
2017年2月 pp.46-61.

- (9) 同上 pp.9-10.

- (10) 石井英真 『今求められる学力と学びとは－コンピテンシー・ベースのカリキュラムの光と影－』 日本標準 2015年 p.23.
- ところで中教審答申の資質・能力のとらえ方、中でも知識観は、目新しいというよりも、むしろ伝統的であるとさえ言えるのではないか。その根拠は、例えば次の三つの文献に見出すことができる。
- 篠原助市 『教授原論－特に国民学校の授業－』 岩波書店 1942年 pp.15-22.
- 高橋勝 「知識について－新教育における『知識』の革新運動の特質－」 長尾十三二編 『新教育運動の理論』 明治図書出版 1988年 pp.158-174.
- ギルバート・ライル 坂本百大・宮下治子・服部裕幸共訳 『心の概念』 みすず書房 1987年 pp.23-78.
- (11) Ⅲのうち、典拠や情報源を明示していない箇所は、すべて坂本が、いわば参与観察者の立場で入手・収集した各種データに基づいている。
- (12) <https://www.hosen.ed.jp/jhs/intro-jhs/#con1> (accessed 6 March 2019)
- (13) 2016年度バージョンは、次の拙稿に掲載してあるので、参照願いたい。
- 助川晃洋・坂本徳雄 「教育実践におけるパターン・ランゲージの活用－宝仙学園中学校独自教科『理数インター』の場合－」 『教育学論叢』第36号 国士舘大学教育学会 2019年2月 pp.81-82.
- (14) http://eduq.jp/quest_education/ (accessed 18 March 2019)
- (15) 2018年度中学入試から始まった「新入試『理数インター』」では、「理数インター」（と日本語リスニング）が試験科目になっているため、小学生のうちから、その趣旨を汲んだ勉強を続けている生徒がいるかもしれない。なお2018年2月1日に行われた最初の試験の様子は、首都

圏模試センターのHPに掲載のルポルタージュ「（受験情報ブログ＞）宝仙学園理数インターの新入試『理数インター』の面白さ！」と「（同）宝仙学園理数インターの新入試『理数インター』の面白さ（その2）」が伝えている。
<https://www.syutoken-mosi.co.jp/blog/entry/entry001078.php>（accessed 3 April 2019）
<https://www.syutoken-mosi.co.jp/blog/entry/entry001079.php>（accessed 3 April 2019）

参考文献

雑誌記事や学術論文はすべて割愛し、主要な書物に限って列挙する。

安彦忠彦 『「コンピテンシー・ベース」を超える授業づくり
人格形成を見すえた能力形成をめざして』 図書文化社
2014年

井庭崇編著 鈴木寛・岩瀬直樹・今井むつみ・市川力著 『クリエイティブ・ラーニング 創造社会の学びと教育』 慶應義塾大学出版会 2019年

静岡大学教育学部附属浜松小学校 『未来を拓き、生きる子どもを育む 資質・能力を中心に据えたカリキュラムの構想』 明治図書出版 2016年

高木展郎編著 『「これからの時代に求められる資質・能力の育成」とは アクティブな学びを通して』 東洋館出版社 2016年

奈須正裕 『「資質・能力」と学びのメカニズム』 東洋館出版社 2017年

奈須正裕・江間史朗・鶴田清司・齊藤一弥・丹沢哲郎・池田真
『教科の本質から迫るコンピテンシー・ベースの授業づくり』 図書文化社 2015年

奈須正裕編集代表 奈須正裕・久野弘幸・齊藤一弥編著 『知識基盤社会を生き抜く子どもを育てる コンピテンシー・ベースの授業づくり』 ぎょうせい 2014年

- 奈須正裕編著 『教科の本質を見据えたコンピテンシー・ベース
の授業づくりガイドブッカー資質・能力を育成する15の実
践プランナー』 明治図書出版 2017年
- 西岡加名恵編著 『資質・能力を育てるパフォーマンス評価 ア
クティブ・ラーニングをどう充実させるか』 明治図書出版
2016年
- 日本教育方法学会編 『学習指導要領の改訂に関する教育方法学的
検討 「資質・能力」と「教科の本質」をめぐって』 図
書文化社 2017年